

## 「教職員の研究実績の推移」掲載にあたって

研究紀要編集委員長

森野数博

平成3年6月、高専でも設置基準が改正され、教育研究活動等の状況について自己点検・自己評価を行うことが努力目標として定められた。その後学校教育法の一部改正により、平成16年4月から、自己点検・自己評価結果の公表とともに、外部評価を行うことも義務化され、高等教育機関としての存在がガラス張りで見られるようになった。徳山高専が真の高等教育機関として機能するためには、教育研究水準の向上を図り、その活動が社会的に認められるものとなる必要があるであろう。そのためには、厳しい外部評価にも耐えうるように「いい学生を育て」、「地域に貢献し」、「そのために日々の研鑽を積む」、これら三つの観点に留意して職務に励むことが求められる。

本校ではこれまで、これらの目的に対応する次の3項目について、個人レベルでは「年間職務の自己評価」を行ってきた。すなわち、「学内での教育に対する評価」、「地域等への貢献に対する評価」、「研究活動に対する評価」がそれである。また、組織としてもこれら3項目に関する自己点検を毎年行っており、学習・教育レビュー室のホームページ、テクノ・リフレッシュ教育センター年報、研究紀要により、それぞれ当該項目の結果を公開している。しかしながら、前のふたつに関しては本校全体の状況を年ごとの推移も含めてまとめているのに対し、研究活動については、前年分の個人実績を一覧として示すにとどまっていた。そこで、本校全体の研究実績を俯瞰するため、このたび本校教職員の研究実績を開校時まで遡ってまとめ、それに前年度の実績を追記する形で、研究紀要の巻末に毎年、掲載することとした。

データベースは、本校の研究実績として研究紀要に掲載されている「校外発表論文、学術講演、著書、分担執筆など」を基にした。また、これらをまとめる上で留意したのは次の点である。

○研究実績は次の5つに分類する。

- (1) 学協会誌論文：査読付き学協会誌掲載論文（学協会誌論説・解説も含む）
- (2) 校外発表論文：Proceeding、高専教育、他機関の紀要など（講演論文集、広報誌は含まない）
- (3) 学術講演：学協会での学術講演（セミナー・研究会講演及び全国高専教育フォーラムも含む）
- (4) 紀要論文：徳山高専研究紀要掲載論文
- (5) その他：著書、分担執筆、特許

○分類した各項目につき、3学科と一般科目及び職員、ならびに総数についてまとめる。

○論文の編数、発表の件数は年度単位でまとめる（研究紀要2年分を再整理）。

○共著の場合、所属先が同じ場合は1件とし、所属が異なる場合は所属先ごとにカウントする。

（そのため、総数が各所属先の合計と一致せず、少なくなることがある）

なお、「その他」については件数が少ないことと紙面の関係から、ここには掲載しないこととした。

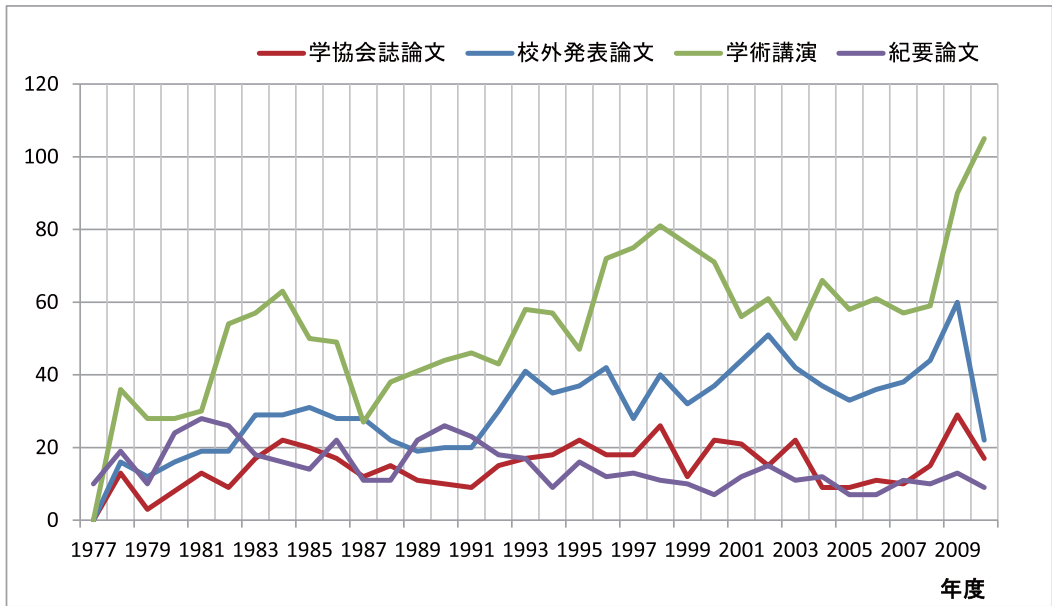
これをみると、本校が開設された1974年度から2010年度までの37年間にわたる研究実績の推移がよくわかる。年度により変動はあるものの現在の状況をざっくりいえば、60名あまりの教員（+職員）により、学協会誌論文が20編、校外発表論文が40編、学術講演が60件、紀要論文が10編といったところであろうか。所属先による傾向もよく表れている。

我が国の発展のため、高専にかけられた期待は大きいものがある。それを実現する原動力は教職員にあり、そのためには日々研鑽を積み、たえず能力をブラッシュアップしておくことが肝要である。この「研究実績の推移」が現状を判断する指標として、お役に立てれば幸いである。

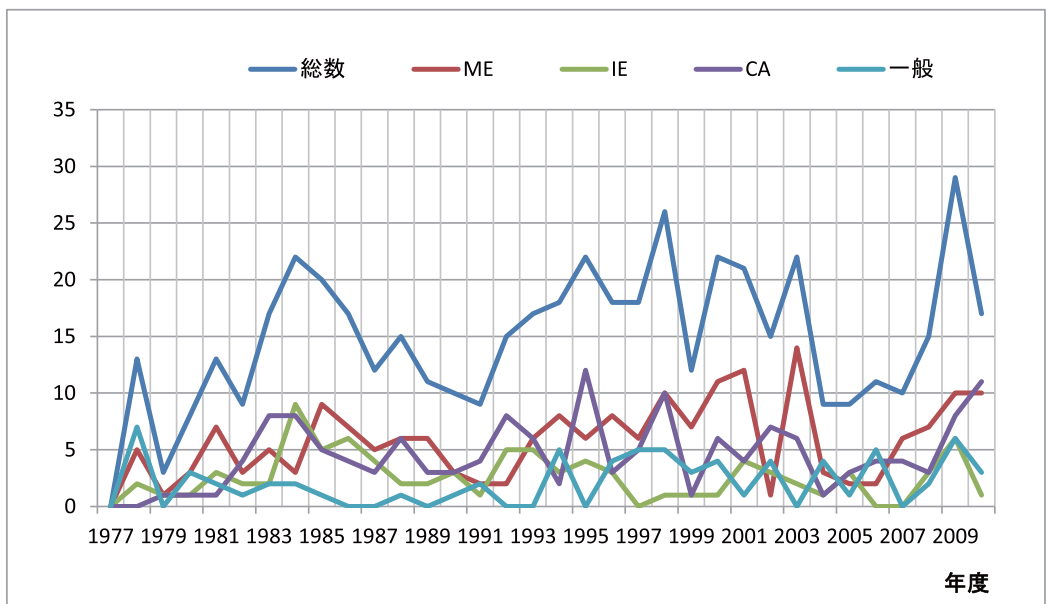
# 教職員の研究実績の推移

徳山工業高等専門学校

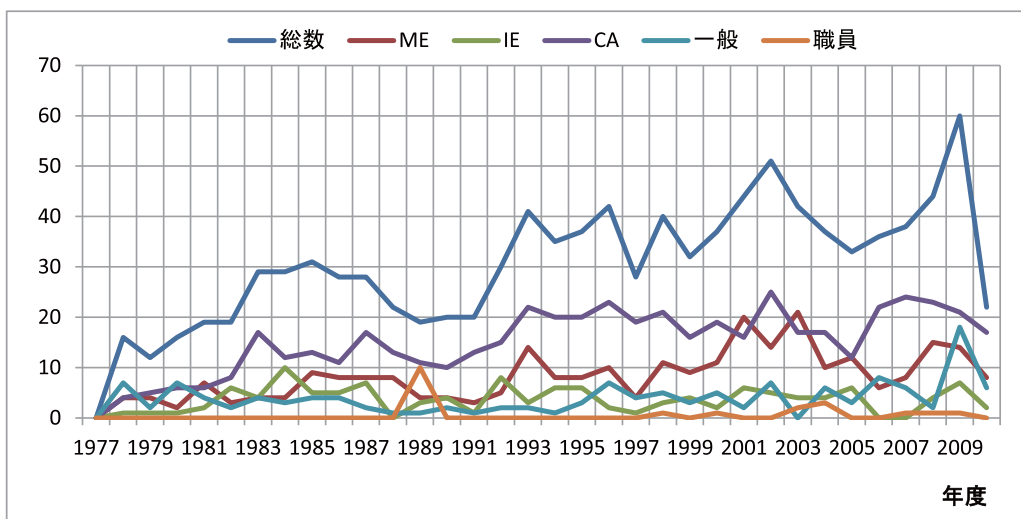
学協会誌論文・校外発表論文・学術講演・紀要論文



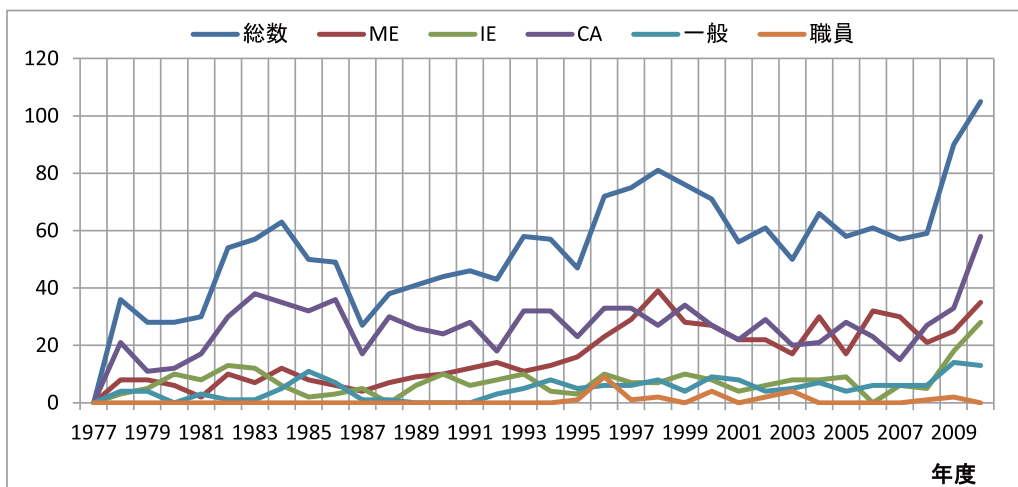
## 学協会誌論文



## 校外発表論文



## 学術講演



## 紀要論文

